

子どもの発達段階に即した社会認識の育成をめざす社会科学習

— 社会生活を豊かにする思考力・判断力・表現力を育てる学び合いの在り方 —

1 社会科で願う豊かな学びの姿

福田きょうだいについて学ぶ前、わたしは困った人を助けることはやろうと思っていたけど、あんまり深く考えていませんでした。でも学んだら、とても大変だということがわかりました。2人は、その頃誰も困った人を助けようとしていなかったのに、孤児を助けたり、盲啞学校を建てたりしました。それも、そのために自分のものを売りはらったり、自分がつくった学校なのに校長をやめたりしてまでずっと困った人を助けたいためにがんばりました。だから、助けようとしていなかった人たちからみとめられて、ほじょ金をもらえるようなことになりました。それがいつの間にか、今の人にも伝わってきました。がんばってみとめられて今の人に伝わってきたから、Bくんが言ったように、スリッパをそろえたりお年寄りに席をゆずったりしているのかなと思いました。わたしが困った人を助けるということをしようと思ったのは、2人のおかげだなあと思いました。

(小学4年 児童A)

これは、児童Aが「福田きょうだいのぎょうせきと私たちとのかかわりについて考えよう」の学習後にふりかえりとして書いたものである。このふりかえりから、学習を通して、困難にめげることなく福田きょうだい福祉活動に取り組み、社会に認められていった過程について、児童Aが理解していることがわかる。それだけではなく、このように学んだことや児童Bの学習中の発言を受け、「わたしが困った人を助けるということをしようと思ったのは、2人のおかげだなあと思いました。」と書いている。この言葉から、2人が生きていた時代だけでなく、現在のくらしにつなげながら福田きょうだいの行いの意味の大きさや深さがどれだけのものなのかを考え、そこに価値を見いだしている児童Aの姿をとらえることができる。

最初は、憲法は私にとって身近なものではなく、まったく分かりませんでした。でも、第9条や新しい人権をめぐる、改憲か護憲かを考えたり、班での話し合いやクラスでのディベートを通して深く考えることができました。賛成派、反対派の本当に多様な意見があり、私が思いつかないような意見がありました。いろいろなことが複雑に絡まり、答えのない問題だと思いました。国民が主権者で、多数派が動かす時代だからこそ、今の私たちにできることは、一人一人が憲法について自分の意見を持つことだと思います。私たちの世代のときに、国々の関係や時代の流れを考えながら、自分たちの生活がより良くなるように憲法について考えていきたいです。

(中学3年 生徒C)

これは、生徒Cが「憲法改正について考えよう」の学習後にふりかえりとして書いたものである。このふりかえりからは、社会が内包する問題に気づき、学習を進める中で、他者の多様な意見を聞くことで、簡単に解決できる問題でないことを踏まえたうえで、この問題を解決していくために自分がすべきことを述べている。そこからは、憲法遵守や人権尊重といった、社会のメンバーに必要な価値観のみならず、よりよい社会につくりかえていこうとする社会参画の姿勢がとらえられる。

このように、自分のくらしや直接体験の中から疑問を見付け、調べ学習や学び合いを通して問題解決を図ることで、分からなかったことが分かるようになること、さらに、分かったことを今の自分のくらしにつなげて考えることによって、社会の見方・考え方が変わるとともに、よりよい社会の創造に向けて、どのような行動をとっていけばよいかという社会参画の芽生えが見られることが大切だと考える。

本学校園社会科部（以下、社会科部と略す）では、児童Aや生徒Cに見られるような豊かな

学びの姿を目指しており、11年間の学びを通して目指す姿を以下のようにまとめている。

- 積極的に追求を行うことを通して、知識を関連づけたり構造立てたりしながら社会的事象の意味や意義について、多面的・多角的に判断していく姿。
- 自分のくらしや生き方を社会的事象を通して考え、社会の主体者として社会に参画しようとする姿。

2 昨年度までの研究の経緯

(1) 社会科における思考力・判断力・表現力

社会科部では、社会科における思考力・判断力・表現力は相互に深く関連しており、切り離せないものであるととらえつつ、以下のように考えている。

- 思考力 …… 社会的事象を多面的・多角的に考察する力、社会的事象の意味・意義を解釈する力、事象の特色や事象間の関連をつかむ力。加えて、これらの力で得た知識・概念などをまとめる力。
- 判断力 …… 公正に判断する力、多様な社会的な見方や考え方ができる力。公正に判断する力は、事象を科学的に判断することだけでなく、未来に向けての子ども自身が生き方を判断する力を指している。つまり事実判断の上に立った価値判断ができるということである。
- 表現力 …… 思考・判断したことを他者に伝える力。ここでの表現力とは、「自分の考えを論述する力」と考えている。社会的事象の中の問題に対して、根拠をもって自分なりの意見や考えを表現できる力の育成をめざしている。

また、思考力・判断力・表現力を11年間のつながりからまとめ、各ブロックごとに以下のように整理してきた。

- 初等部前期 … 没頭して遊んだり体験したりしたことから気付きや課題をもち、自分なりに考えたり工夫したりして、そこで得た思いや疑問点を素直に表現する力。
- 初等部後期 … 身近な社会でおこる社会的な問題を発見し、問題を解決するために、ある観点をもって、見学・調査して、自分の考えをもち、友だちの意見などを比較し練り合って自分の意見を決め、それを相手にわかるように伝える力。
- 中等部 …… 社会が内包する問題を発見し、社会的事象の特色や相互の関連をつかんだり、意味や意義を解釈することにより、他者の調べたことに対して意見を述べたり、考えを伝えることができたり、社会をよりよくつくりかえていく情報を発信する力。

これまでの研究で、知識や概念を構造的に子どもが習得し、社会認識を深めるためには、教師が「中核となる視点」を設定し単元を構成することが重要であることがわかった。そして、子どものなかで習得した知識・概念を「中核となる視点」につなげて考えることが、思考力・判断力・表現力を育成することにつながることも明らかとなった。さらに、この思考力・判断力・表現力の育成には、①習得した知識・技能を「活用」する学習活動をし、系統的・継続的に行うこと、②他者とかかわり合いを大切にした学習活動を取り入れることが有効であることがわかった。特に②については、次の四つの学習場面を設定し、実践を行った。

- a 具体的な活動や体験の中から、問題を発見したり必要な情報を収集したりする学習活動
- b 他者とかかわり合いながら、発見した問題を整理し、共通の課題としてとらえる学習活動
- c 自分とは違った見方・考え方をもち他者とかかわり合いによって、これまでの見方・考え方をゆさぶる学習活動
- d 思考・判断したことを、根拠をもって自分の言葉で他者にわかりやすく伝えることにより、対話が成立する学習活動

この思考力・判断力・表現力の育成については、実践後に子どもたちが書いたふりかえりやイメージマップを検証することによって、他者とのかかわり合いを豊かにもつことが有効だといえることを明らかにすることができた。これと並行して、社会科における思考力・判断力・表現力を11年間のつながりから整理したことで、発達段階に応じて高めていかなければならない力や切り離しては考えられない要素が明らかにしてきた。これらこれまで明らかにしてきたことをふまえ、さらに思考力・判断力・表現力が高まるような互いにかかわり合い学び合える学習の在り方を追求していきたい。

(2) 思考力・判断力・表現力を育成する学び合い

昨年度は、思考力・判断力・表現力をより育成するために学び合いを深めることを考え、そのための手立てとして新しい見方・考え方と自分の考えとのかかわりについてより深く考えて、練られたものを表現できる「第2の学び合い」を成立させる単元構成をした。このことにより、自分の意見が確かだと思った理由を述べたり、友だちの考えを聞き考えを深めたりする姿を見ることができた。さらに、前時までのふりかえりや、学習中の子どもの認識を教師が把握し、評価規準と照らし合わせながら「掘り下げる」と「提案する」の二つのはたらきかけを行うことで、学び合いの論点を整理することもできた。

こうした学習の中での子どもの姿やふりかえりの記述から「第2の学び合い」を行うことによって思考力・判断力・表現力が高まったととらえられる一方で、その力がどれだけ社会生活を豊かにすることにつながるかという点では明らかにできていない部分が多い。学習の中だけで終わる学びではなく、子どもたちの今、そしてこれからの社会生活につながる思考力・判断力・表現力を育てていく学び合いの成立が求められていると考える。そのための方策を明らかにしていく必要がある。

(3) 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

昨年度は「思考力・判断力・表現力」の育成について、各小単元における最終の子どもの「ふりかえり」や「イメージマップ」を集積し、それを活用した評価を行うことで、子どもの思考の変容を教師がとらえるとともに、子ども自身が自分の学びをとらえられる手だてとした。単元を通しての「思考力・判断力・表現力」の評価規準については、一昨年度に整理した「思考力・判断力・表現力の11年間のつながり」と、「社会科部で願う豊かな学びの姿」を基盤に据えて、各学年と各単元に応じて設定した。この評価規準を用いて「第1の学び合い」と「第2の学び合い」の前後で評価することで、社会認識の変容、言い換えれば思考力・判断力・表現力の高まりをとらえてきた。

しかし、評価は学習後に行うだけのものではなく、子どもたちが思考し発言している学習の中でも積極的に行っていくものであるし、そうすることによってより子どもたちの思考力・判断力・表現力は高まるだろう。そのためにも、ねらいや評価規準を明確に定めるとともに、より適切なタイミングで評価言を伝えていく必要がある。

3 本年度の研究

そこで今年度は、思考力・判断力・表現力を育成するための手立てとして、「第2の学び合い」が有効であるかについて、実践を通して分析することを中心に据える。これはつまり、自らの考えをしっかりとった上で、その考えをさらに高めようとする「第2の学び合い」が社会性の育成において有効かどうかを検証するものになる。

そのために、これまでも大切にしてきた単元構成や「掘り下げる」や「提案する」といったはたらきかけに加え、以下の2点を大切に実践をすることによって、子どもが自らのくらしを

豊かにしたり、社会の形成者としての資質が高まったりする上で有効か検証していきたい。

① 自らのくらしや社会生活をより豊かにすることにつながるための思考力・判断力・表現力をとらえる評価規準の設定

思考力・判断力・表現力をとらえる評価規準については、「思考力・判断力・表現力の11年間のつながり」と「社会科部で願う豊かな学びの姿」を基盤に据えて設定し、「第1の学び合い」と「第2の学び合い」の前後での社会認識の変容をとらえてきた。

今年度は、「学校で学んだことを自らのくらしや社会生活にいかし、より豊かにしようとする姿につながるうか」という視点で評価規準を定める。そうすることで、より明確に「第2の学び合い」の有効性を検討したい。あわせて、「第2の学び合い」を行う学習場面を、それまでの学習で習得してきたことを自らの考えをまとめることや主張をつくりあげること、意志を決定することにいかす場面として位置づけ、「第2の学び合い」を組み込んだ単元構成で社会参画の芽生えが可能か検証したいと考える。

そのためには、子どもたちが追求する課題を自らのくらしや社会生活に近づけたものにする必要がある。また、追求する過程で、自らのくらしと引きつけながら調べたり考えたりするよう子どもたちに提案していくことが大切であろう。

このような対象との出会いと学習過程を経ることによって、子どもたちは学習する対象としての社会事象を自分に引きつけて考えるであろうし、そこで思考し判断したことを自らのくらしや社会生活にいかそうとするのではないかと考える。自らのくらしや社会生活をより豊かにすることにつながるための思考力・判断力・表現力をとらえる評価規準の設定することで、子どもの高まりをとらえることはもちろん、授業づくりの在り方も考えていきたい。

② 子ども自らが変容をとらえられるふりかえりの実施

子どもの思考の変容を教師がとらえるためになりがちであったふりかえりを、子ども自身が学習前の自分と今の自分を見つめ、その変容に気付くためのものとしてもう一度位置づける。

先に紹介した児童A、生徒C両者のふりかえりにおいても、「初めは□□だったけど、学習して〇〇と考えるようになりました。」という表現が見られる。このように、自らの変容に気付く文章化することができること、そのものが子どもにとっては大きな成長であろう。その成長への自らの気づきを意図的に取り上げ学級全体で共有することによって、子どもの学びに対する有用感、達成感が高まるようにし、その後の学びをつくりあげる姿につなげたいと考える。

そのためにも、単元のねらいや学習のめあてにそったふりかえりができるよう言葉かけを工夫し、自らの変容をとらえるふりかえりを書くことによって、自らのくらしや社会生活と学習内容をつなげられるようにしたいと考える。

4 成果と課題

今回、自らのくらしや社会生活をより豊かにすることにつながるための思考力・判断力・表現力をとらえる評価規準の設定を設定したことによって、「掘り下げる」と「提案する」といったはたらきかけの視点が明確化し、論点の整理によりつなげることができてきている。今後は、めざす子どもの姿に迫るためのよりよい評価規準のあり方と評価のしかたを考えることによって、自らのくらしや社会生活をより豊かにするための学習の実現をめざしたい。具体については、事例を参照していただきたい。（文責 和田 倫寛）